

ばちんこ依存問題の回復支援システムの連携強化を呼びかけ

「ばちんこ依存問題相談機関の「リカバリーサポート・ネットワーク」(RSN)は2月25日、大阪市中央公会堂において「第4回援助職者・サポーター養成講座」を開催した。

「事例から学ぶギャンブリング問題への理解と対応」と題し、「ギャンブリング問題に関わる援助職者及び医療、福祉、司法、金融相談関係者、ホール関係者等」を対象に約40名が参加した。

リカバリーサポート・ネットワークは、2006年4月に第三者機関「ばちんこ依存問題相談機関」として、ばちんこ・パチスロの遊技に関する依存及び依存関連問題解決の支援を行うことを目的に設立された。ばちんこ依存問題での本人からの悩みやその家族を対象に、無料で電話相談を実施してきた。2006年度989件、2007年度846件、2008年度(4月～1月)967件と、問題相談に取り組んでいる。ばちんこ依存については、実態調査や回復支援システムが未整備であり、依存問題の回復支援サービスが、問題の解決や予防に有効であるとの信念のもと、回復支援のネットワークづく

りに取り組んでいるところ。

今回の養成講座はその問題の共有とネットワークづくりが目的といえ、RSN代表の西村直之氏、安高真弓氏(オフィスサーブ)、稲村厚氏(稲村厚司法書士事務所、中村努氏(ワンデーポート施設長が、パチンコ(ギャンブリング)依存問題への対応と課題を出し合った。

「情報収集のポイントと問題の整理」、体験者談、「借金問題への対応」、「家族相談と介入の初歩」、「当事者への介入と回復支援」などを通して、援助職者・サポーター養成はもとより連携の重要性を認識しあった。「私たちの活動は、遊技

業界の英知によりスタートした。(パチンコに対する)世間の認識には千差万別あるとは思いますが、問題が放置されないこと、尊い命を救うことが大切なことです。RSNのホームページでは、全国の相談機関へのリンク網の充実に努めている。RSNは小さいですが、皆様のひとつひとつの情報をつなぎ、お互いが連携でき

るような機関になるよう今後も努力していきたい」西村代表はRSNの使命と役割を訴えた。

情報収集のポイントと問題の整理(要旨) 西村直之氏

○ゲーミングとギャンブリング
今回「ギャンブリング」という言葉を使っている。なじみのない言葉と感

じる方がいるかと思う。これには意味があり、ゲーミング(主に時間や勝敗のみを賭ける行為)とギャンブリング(金銭的リスクを伴い賭ける行為)という言葉でとらえることが適切だから。これまで、「ギャンブル」という

いう使い方や、定義では日本では違和感がある。日本の刑法で賭博は禁じられており、言葉の表現としてギャンブル依存症というように呼び方のままでは、犯罪的なイメージも刷り込まれ、受け止められる事につながらかねないので、避けたもの。

そこで、「ギャンブリング」とは、「民法であれ、違法であれ、金額の多い少ないにかかわらず、偶然による不確定な結果に自らの価値あるものを失う危険を冒し、時間・お金・信頼・将来などを賭ける行為」をいう。この言葉を定義を強調するのには理由があり、言葉が偏見を生み、偏見が援助を阻害するようなことがある。それはならないから。

○ギャンブリングの種類

ギャンブリングの種類には様々なものがある。公営ギャンブルはもとより、パチンコ・スロットマシン等のゲーム機。広義では証券、債権または先物取引市場への投資行為なども含まれよう。

○ギャンブリング問題に関わる前に

【基本原則】
〈原則1〉ギャンブラーだから、ギャンブリング依存症かどうか

